

☒ 話すこと ☒ 書くこと

☒ 個に応じた教材の作成や指導の充実
☒ パフォーマンステストでの活用

☒ 授業での活用
☐ 課外活動での活用

☐ 家庭学習での活用

実践のポイント

生徒一人一人の発話量・発信機会の増加と統合的な言語活動の活性化

実証概要

<校数> 12校(中学校:3校、高等学校:9校) <人数> 4,233名(中学校:149名、高校:4,084名)

<学年> 中学校:第3学年、高等学校:第1、2、3学年

<アプリ等> GELP(株式会社ベネッセコーポレーション)、Gemini(Google社)

<AI機能について> 会話練習やディベート練習などの場面別のロールプレイ、「話すこと」「書くこと」における即時フィードバック、生徒の学力や関心に応じた学習内容の提供、CEFR-Jに基づくレベルチェックテスト(随時)

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●ディベート・意見交換前後における「中間指導」としての活用

ディベートや意見交換の途中段階において、AIを中間指導として活用する実践が効果的であった。具体的には、生徒が主張・理由・具体例を一通り表現した段階で、AIを用いて語彙・文法・表現の確認や修正を行い、発話への不安を軽減した上で、再度発話に戻る授業構成が行われた。これにより、生徒は安心して発話や意見の再構成に取り組むことができ、発話量の増加や意見の質の向上が図られていた。また、「話すこと」の活動におけるAIからのフィードバックを生かして「書くこと」の活動へとつなげることで、論理性や正確性を高める取り組みが行われた。

●AI時代の英語授業 ～人と人との関わりが学びを深める～

対話を通じた思考の深まりを保証することや発話を拾って価値付けるフィードバック等の指導は重要性を増し、AIを使用する時ほど、教室内のインタラクションが学習の核となるとされる。さらに、生徒の情意面に配慮した指導を新たに重視する必要がある。「何が良かったのか」「どこが伝わったのか」を言葉で伝えるのは教師の役割であり、不安の軽減や自信の形成には、教師・外国語指導助手の関わりが不可欠である。AIを使うほど、教師の専門性(見取り・発問・フィードバック)がより問われることになる。

実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①生徒の英語力の変化

中学校3年生の「話すこと」では、A1相当に満たない層が減少し、A2相当の層が増加した。「書くこと」では、A1相当からA2相当への大きな推移が見られた。

高校生の「話すこと」では、A2.2の層が減少し、B1.1の層が増加した。「書くこと」ではPre-A1層が減少し、A2～B1帯の増加が見られた。

②生徒の関心・意欲の変化

54.8%の生徒が、GELPの活用により英語への関心や学習意欲が向上したとアンケートに回答しており、そのうち、およそ3割の生徒が「話すこと」への苦手意識が減ったと回答している。特に、間違いを気にせず何度でも練習できる点や即時のフィードバックが学習意欲を支えていると思われる。

③教師の指導の変化

およそ半数以上の活用リーダーに変化が見られ、事後アンケートでは、個別フィードバックの時間が確保でき、より質の高い指導が可能となったとの回答が多かった。また、言語活動の量が増えたとの回答も寄せられた。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●モデル校から広がるAI英語活用リーダーの育成 ―協働的研究と実践共有によるAI活用研究の深化―

モデル校において、授業研究会を実施した。これらの研究会では、AI英語活用リーダーを中心に、小・中学校を含む他校の英語教員との情報交換を行うとともに、県内大学教授等の有識者からの助言を受けることでAI活用に関する理論的及び実践的理解を深める機会となった。さらに、専用プラットフォーム上で実践例の共有・集約を行うとともに、県教委主催のオンライン研修においては、GELPの効果的な活用について実践に基づいて学ぶ機会を設けた。これらの取組を通じ、各モデル校のAI英語活用リーダーが他の英語科教員と知見を共有し、自校の実情に即したAI活用研究を一層深化させた。

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

本事業では、モデル校及びAI英語活用リーダーを中心に、ディベート等の言語活動とAIを組み合わせた授業実践を重ねることで、生徒の発話量増加や不安軽減、形成的評価の充実といった成果が見られた。また、授業研究会や研修等を通じて、各モデル校での実践が共有され、教員の指導観転換のきっかけとなり、AI活用の理解の深化へとつながった。一方、論理構成の指導や価値付けについては、教師が担うことの必要性が改めて明らかとなった。今後は、AIと教師の役割を明確にした授業モデルの構築と、AI英語活用リーダーによる継続的な普及・横展開を進めていく。